蒼の封印

鈴村弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼の封印

【Ｎコード】
Ｎ２０４３Ｘ

【作者名】
鈴村弥生

【あらすじ】
カリスト公国の王宮筆頭魔導士が失踪して一年。真維は釈然としない怒りを胸に秘めていた。婚約者である公子セイルロッドを説き伏せて、彼女は消えた魔導士を追って敵国へ旅立つ。不定期連載です。１０／２１題名変更しました。元々こちらが本当なんです

序章（前書き）

他か止まってるのに新たな連載。自爆？　見切り発車？　どこかで見た？　キャラの名前被ってる？　いろいろありますが気にせずに。一話一話は短めに、さくさく読めるようにしていきたいです。どうぞよろしく。

序章

カリスト公国筆頭宮廷魔道師ゼルダ・カドフェルが消息を絶って、既に一年が経過していた。

コダール大陸でも五指に入るとされる魔力で近隣諸国に名を轟かせる高位の魔導士であり。それ以上に策士として切れの良い頭脳を誇る、世継ぎの公子の懐刀。

わずか二六にして公国の魔導士の頂点に立つ男。

彼の経歴、実力、その全ての観点からみても、これは異常な事態である。

折りしも、彼が失踪した頃と時期を同じくして隣国グリフ王国は、国境を接する近隣諸国へ宣戦布告した。

コダールで最も広い北部一帯を押さえる大国ながら冬には凍る港しかないグリフ王国は、これまでも南に位置する国を得んと小競り合いが絶えなかった。だが、西と東方も巻き込んだ異例の三面戦争へ突入したのは初めてである。

しかもグリフは全ての正規兵に魔術を封じ込めた武器と防具を持たせていた。その威力はすさまじく、一人の兵で小隊一つを易々と倒せる程。

緒戦み見せ付けた脅威は各国を震え上がらせ、その領国線を書き換え続けていた。

幸いカリスト軍は幸運に恵まれたのか、魔法兵器の配布が少ない部隊と対峙したらしく、辛くも防衛線を維持している。

だから、いまだ平和ズレをした諸貴族の中からこんな噂が囁かれるのだ。

「ゼルダ・カドフェルはグリフに寝返ったのだ」

彼が何処に向かい、そして消息を絶ったのか、知っている者は極僅かである。

だが、知っている者ほど、その噂に動揺していた。

なぜなら、彼はグリフに単身潜入し、そして消え去ったのだから

……

1

カリスト公女、ダイナ・フラルウ・カリストーナにとって、最愛の婚約者の失踪は、人生そのものにつけられた大きな痛手であった。

常に傍らにあり、どんな我儘でも笑って聞いてくれる。

甘やかすばかりだった年上の幼馴染。

二年前。幼い頃からの許婚であったグリフの王太子が死んだとされ、グリフ政変の中で婚約が立ち消えたとき、兄の親友である彼が求婚してくれた。

腫れ物を扱うような貴族達の態度の中、彼からの救いの手に天にも昇る心地だった。

そして彼は理想の恋人となってくれた。

手ずから育てた花を贈ってくれ、常に甘い囁きと優しい腕で包まれる。

元の許婚ともこれほどの恋は出来なかっただろうと親友に語り、ダイナは甘い蜜月に酔ったものだった。

だからこそ、共に築く未来を信じて疑わなかった二人目の婚約者の突然の失踪は、柔らかくいとけない心を打ち砕くのに十分な衝撃だったに違いない。

追い討ちとして口さがのない宮廷雀たちが、二度も相手を失った

公女の不幸を皮肉な視線で揶揄し、「男を破滅させる災厄」とまで陰口をささやいた。

心無い噂に、はじめの数ヶ月彼女は憔悴し病床に臥した。

兄の婚約者となった親友に心からの看病を受けても、公女の絶望は深く回復は遅い。

失踪の理由を知らないが故に、ダイナは自分が捨てられたのだと思い込んでいたからだ。

彼女の兄を含め、その周りの近しい者達は、公女に真実を明かす事も出来ず、ただ手をこまねいて見守るほかに術を持たなかった。

だが、どんな冬にも春は来る。

絶望に打ちのめされた小さく凍えた心を解かし、暗く閉じ篭った部屋から明るい光の庭へ。

公女の微笑を取り戻したのは、自身も春風に例えられる優しい心の青年である。

ゼルダ・カドフェル無き今、公子の片腕として国を支える優秀な文官であった。

筆頭魔道師が行方を絶って一年。

必然的に自然解消となった婚約と共に憂いは消えたかの如く、公女は新たな婚約者の側で以前と同じ微笑を浮かべている。

心の奥の大きな穴に、硬く扉を閉めて。

2．（前書き）

やっと主人公の登場。

2.

「マイ。もう、そんな怖い顔をしないで下さい」

ダイナは、ドレスを選ぶ手を休めずに、窓辺に背を預けて突っ立ったままの親友に語りかけた。

白と金で統一された公女の部屋は、品の良さとカリストの富を象徴している。

カリストは大きな湖を海と繋ぐ大河によって交易が盛んであり、穏やかな天候のおかげで農作物も良く育つ。そして王都を見下ろす霊峰には、希少価値のある宝石も産出していた。

山間の小国ながら、カリストはコダールでも有数の豊かな国である。

そんな国の姫君の部屋は、調度品の全てが瀟洒で品が有る。

白い地に白い花が浮き出る壁紙、白い木材の家具には控えめな金細工の縁飾り。淡いピンクのカーテンは、寝台の天蓋と合わせてあった。

全てが淡い夢のような部屋の中で濃い蒼を纏う、茶色い髪の少女は追いかけてくる現実だ。

夢の中へ逃げ込むために、公女は殊更手元に視線を向け声だけは明るく張り上げた。

「ねえ。婚礼衣装を選ぶのを、手伝ってくださいませ」

何枚もの純白のドレスが、公女の寝室に広げられている。

御用達の織物商が持ち込んだサンプルは、どれも贅を凝らした見事なもので、若い娘ならばみな一様に目を奪われて然るべき品々だろう。

「貴方の衣装も、一緒に選んでしまいません事？　お兄様がお喜びになりましてよ」

もうすぐ姉妹となる親友に向き直って、楽しげに一枚のドレスを取り上げる。

彼女は兄の婚約者でもあるのだ。

「ほら、これなんて、きっとマイに似合いましてよ」

シンプルなプリンセスラインのタイトドレスには、腰からヒップラインに会わせて、レースのボアが後ろに流れる。大人っぽさとかわいらしさを混在させたデザインは、なるほど少女から女性に成長しつつある、栗毛の少女に似合いそうである。

だが、ほとんど無表情に公女を見詰める濃茶（トルマリン）の瞳を、そのドレスは僅かも惹き付けはしなかった。

今のダイナには、濃茶の瞳は辛く感じられた。もう一人の、深い琥珀を思い出すから……

だから彼女は、さりげなく視線をはずし、再び優しい夢を与えて

くれる品々に顔を向けた。

「気に入りません？　むう～。どれが良いかしら……」

薄紅の髪に指を絡ませ、小さく小首を傾げる。

あくまで楽しげにはしゃぐ公女に、秋葉（アキハ）　真維（マイ）は小さく吐息を吐く。

「それでいいの？」

初めて発された声は、静かでありながら、鞭のように公女の心を打つ。

彼女の声は、追いついてきた現実。

一瞬震えた細い肩は、そのまま軽く竦められた。

「何がですの？」

身についたロイヤルスマイルで見返してくる公女に、容赦の無い問いが投げつけられた。

「このまま結婚していいの？　ゼルダの事、本当に忘れたの？」

同じ琥珀の瞳が、親友の瞳に重なる。

――ほら、ダイナ。俺が育てた花だ。綺麗だろう？　だが……お前さんのほうが綺麗だな……

――恥ずかしいですわ、ゼルダ。そんなことを言ったら。

――本当の事を言ってるだけなんだぜ。惚れた欲目かな？

――ゼルダったら……

――愛してるぜ、ダイナ

菫色の瞳は、深い琥珀には耐え切れない。公女は再びドレスに目を落とした。柔らかな夢の残滓がまだ残っているそこへ。

「もちろんですわ。だからこうやって、一生懸命ドレスを選んでいるんですわ」

にっこりと笑ってみせる公女に、真維は苛立たしげに眉を寄せ、一歩前に進み出る。

「じゃあ、何であたしを見ないの？　アルマンと結婚するって決めてから、あんたあたしの目を、まともに見たこと無いでしょう」

強い意志が叩きつけられる。公女は俯いたまま、真維に見えないようにして目を閉じた。

「そんな事ありませんわ。わたくし、マイの顔をちゃんと見ていましてよ」

ぐいと肩を捕まれ驚いて顔を上げると、トルマリンの双眸が真摯な光を称えて、僅かに見上げてくる。

小柄な少女は、だが誰よりも強い精神（こころ）を持っていた。

たった一人でこの世界に迷い込みながら、それでも自分の居場所を切り開くほどに。

その強い精神が、そのままぶつけられる。

「顔じゃないよ、あたしの目って言ったんだよ。あんたあたしの目をまともに見ようとしない。辛いんでしょう？　あいつと同じ色をしたこの目を見るの」

ついに公女は、苦しげに目を伏せて顔を逸らした。

「マイ、やめてくださいですわ……わたくしは、マイのように強くないんですわ……」

両手で掴んだ肩が微かに震えだしたのを感じてか、真維は後悔と共に手を離し謝罪の言葉を返してくる。

「ごめんダイナ。ただね、結婚する前に、本当に後悔しないか聞きたかったの。あたし、あんたがゼルダをどれだけ好きだったか知っているし。ゼルダがあんたをどれだけ大切にしていたか知ってるから」

だからこそ、二人の幸せを願っていたのだ、自分のためにも……

「もし、まだゼルダが好きで、そのまま結婚するんなら、アルマンにも悪いじゃない？　おせっかいなのは判ってる。でもね、後で苦しむより、今苦しんで、本当の答えを出したって良いじゃない？もし結婚した後にゼルダが帰ってきたら、あんたどうするの？」

親友の問いかけに、菫色の瞳にはじめて強い光が宿った。それは悲しみであり、怒りなのかもしれなかった。心の奥に夢と幻想で蓋をした扉が軋む。

「ゼルダはわたくしを捨てていったんですわ。捨てた女が何をしようと、あの人は気にしませんわ」

真維の瞳が、打ちのめされたように揺れた。

「ダイナ……本当にそう思ってるの？　ゼルダがあんたを捨てていったって。あいつが、あんたを捨ててグリフに寝返ったって噂、信じてるの？　セイルとあんたのためだけに生きていたあいつが？」

かすかに震える声が、真維の動揺を教えてくれる。きっと頑なになっているダイナの心に楔を打ち込みたくて、口止めされている真相をいっそこのまま言ってやろうか？　と苛立ったに違いない。

親友は何時もながら、短気なくせに律儀だ。

勝気な少女が意を決して口を開くのをわずかに覚悟して見詰めた時、背後から柔らかな声がかかった。

「姫様、マイ、どうですかぁ？　ドレスは決まりましたか～？」

多少間が抜けて聞こえる温和な声音に、公女は救われた心地で微笑を浮かべる。夢が春風に乗って戻ってきた。

「アルマン……あら、お兄様も？」

公女の声に、今度は真維がはじかれたように振り返る。

寝室の入り口に、公女の新たな婚約者アルマンディン・ラムダと、彼の君主である世継ぎの公子、セイルロッド・エルク・カリストーナが立っていた。

「御婦人方のドレス選びにお邪魔するのは失礼かと思ったが、なにぶん気になってね」

そういって微笑む己が婚約者に、真維は強い視線を向けた。

「セイル。あたしもう黙ってられない。言うからね」

そう宣言する少女に、公子は僅かに苦笑して首を振る。

「ダイナは知っているよ。ゼルダが何処に行ったのか。私が話した」

「な！？」

公子の言葉に、真維は再び公女へ目を向けた。

「私が殿下にお願いしたんです～。姫様に、本当の事をお話して欲しいと～」

文官がすまなそうに口を添える。

「……知ってて、出した結論なのね。ダイナ」

事の成り行きを自分が知らなかった苛立ちより、今の現実を把握する為にだろう、真維は公女を見据えた。

「ゼルダはあんたやカリストの為にグリフに行った。そこで消えた。それを知ってて、それでもアルマンを選んだのね」

容赦の無い畳み掛けに、公女は親友から背を向け俯く。もう、現実には向き合いたくない。

「決めましたの……もう良いんですの」

震える声が搾り出された。

「ゼルダの事は、忘れましたわ……」

震え始めた細い肩を見かねて、アルマンディンがそっと歩み寄ってくれる。

「姫様」

婚約者の優しい腕に公女はそっと身を寄せ、そのまま込上げる嗚咽を堪えきれずに泣き出した。

「ダイナ……」

為す術も無く親友を見詰める真維に、文官は悲しげな微笑をむける。

「マイ。私は、ゼルダ様が戻られるまで、姫様をお守りするつもりです～。何時になるかは判りませんが、それまで姫様の笑顔をお守りできるのなら、それで良いんです～」

何処までも優しいその言葉に、腕の中の公女は頭を振る。

「違いますわ、アルマンが好きなんですの。わたくしはアルマンが好きなんですの……」

自らに言い聞かせるように、なんども呟きながら、それでも顔は上げられず、公女は泣きつづける。

そして心の奥の扉をさらに硬く閉めるのだ。もう二度と悲しみに囚われないように。

真維は、ただ立ち尽くすしかなかった。

「マイ……こっちへ……」

公子に促され、真維は抱きあう二人を残して、公女の私室を後にした。

2．（後書き）

「蒼」について。
蒼という字は、元来鮮やかな青色を表すのだそうですが、Kはなぜか、どうしても、ちょっとくすむか醒めた青色を連想します。
で、この話で「蒼」はそういう『あんまり綺麗じゃない青色』です。
ご了承ください。

3.

「あの二人、セックスレス夫婦になるわよ」

私室に戻って開口一番、己が婚約者の発した科白に、カリストの公子は溜息をついた。

「マイ、そんなあからさまに言わなくても……」

宥めるような公子の声など耳を貸さず、トルマリンの瞳が睨みつけてくる。

「アルマンはゼルダが帰ってくるまでの中継ぎの代役のつもりだし、ダイナはゼルダに未練たらたらじゃない。あんなの傷口に絆創膏貼ってるだけよ。上手くいきっこないわ」

正確な上容赦の無い現状分析に、ここには居ない親友の姿がだぶる。

本質的に同類なのだと昔彼は言った。それを裏付けるように、真維は筆頭魔道師代行を、見事にこなしてのけていた。

秋葉真維。カリストの慣習で呼ぶならば、マイ・アキハ。

四年前、召還魔法実験の失敗により、何処とも知れぬ異世界から呼び出された少女である。

異世界人は驚くほどの魔力を秘め。その高い魔力を以って、瞬くうちに国内でも有数の魔導士に成長を遂げて最高位の蒼に順ずる藍

の魔導士となった。

しかし、彼女の本当の強さは魔導士としての実力ではない。数奇な運命すらも飲み込んで自分に取り込み、笑ってみせる柔軟な精神にあると誰もが言う。

強さと生命力。

全てをあらわす笑顔は太陽に例えられ、彼女の周りの者達を魅了する。

その強さが欲しかった。たとえ、誰を押し退けようとも。

あの時の己の宿命に挫けかけた自分には、何よりも必要な物だった。

そして獲た筈なのだが。

その笑顔は、最近では稀なものになりつつあった。

原因は判っている。

親友を気遣う彼女の奥底にある、もう一つの心……

「セイル、聞いてる？」

問い掛けられて、セイルロッドは物思いから浮上した。

「ああ……」

訝しげな茶水晶（トルマリン）に、あいまいな笑みを返し、先を促す。

「どんな傷だって、時間が癒してくれるのは判るし、今のダイナには、アルマンみたいに優しい人が一番必要なのも判るのよ。でもね、優しいばっかりじゃ、庇われるばっかりじゃ、ダイナは弱くなるだけよ」

自分が強いが故に、他人にも同じだけの強さを求めるのは、彼女の悪い癖である。しかも、その強さが並以上である事に気が付いていない。

だが、判っているのだろうか？　そう言っている自分こそが、泣きそうな顔をしているのを……

「心に治癒魔法は掛けられないよ」

涙を嫌う強い双眸が真っ直ぐに見詰めてくる。

「掛けれるわ、ゼルダなら」

公子が首を振る。

「しかし、あいつは……」

「セイルも、あんな馬鹿げた噂を信じてるの？」

そんな事は無いのを真維自身が良く判っている。

消息を絶って一年になるにもかかわらず、公子の下知により、筆頭魔導士はゼルダ・カドフェルのままである。

彼の消息が判明するまで、その役を解かれることは無い。

「グリフには、何度も細作を放って行方を探させている。しかし、あれが何処に居るのか、まったく判らないのだ」

公子の言葉に、真維はゆっくりと目を伏せた。

「セイルは、ゼルダを信じているよね……？」

小さな呟きに、セイルロッドはしっかりと頷く。

「あたりまえだよ。あれの事は誰よりも判っている。カリストを手に入れるためにグリフに寝返るなど笑止千万。もしこの国が欲しいのなら、ダイナと結婚した時点で私を殺せば良い。あれは王位に最も近い場所に居たのだ」

カドフェル家は何度も公女が降嫁している名門貴族。ゼルダの実母も現王の姉である。王族の範疇に入れても良いほど血は近い。

公女降嫁がすんなり決まったのと同じく、従兄弟である彼の継承権の順位は高かった。

ダイナを得て王の娘婿となり公子が夭折すれば、確実に王位は転がり込んでくる。

権謀術数と闇を纏う筆頭魔道師には、そのほうがずっと似合っている。

だが、彼は、策を弄するのを好んでも、権力を欲する性質ではな

い。

そもそも公女であるダイナを、妻にと望んだ事自体意外であった。その後ろに見え隠れする彼の本音を読み取れなかったら、自分はどれだけ反対したか判らないだろう。

常に傍らにあった、夜空色の親友。決して本心を見せない、優しい偽人(いつわりびと)。

彼の献身の上に、今の自分は在る。

「細作の人って魔法持ってないよね」

低い呟きに、その意図を察して、セイルロッドは真維の腕を掴んだ。

「駄目だ」

鮮やかな紫水晶(アメジスト)が、茶水晶(トルマリン)を覗き込む。

「だって、ゼルダがもし捕まっているんなら、きっと厳重な結界の中だよ。あんな化け物なみの魔力の男を閉じ込めておくなんて、生半可なモノじゃない。だったら、魔力の無い人になんてわからない」

「それで君が行くというのか？」

叱責にも似た声音に、臆する事無く少女が頷く。

「うん」

ふわりと小柄な体を腕の中に引き入れる。

「今のグリフが、魔導士にはどれだけ危険な場所なのか、判っているのかい？　そんなところに君をやるわけにはいかない」

抱きなれた細い体に腕を回して、愛しい婚約者を抱きしめる。だが、どれほど抱きしめて、体だけ自分に縛り付けたとしても、その自由な精神を縛る事は出来ない。

「グリフが魔道師狩りやエルド族狩りをしているのは知ってるよ、最近は国境を越えてまで誘拐しているらしいって事もね。筆頭魔道師代行には、いろんな情報が入ってくるわ」

腕の中から、至極冷静な声が返ってくる。

「でもね、あのグリフ行きは、本当はあたしの役目だったでしょう？　理由は、一目では魔導士とわからない事。ただの女の子に見えて、そのくせ魔法が使えて、機転が利く。細作としては最適だって……」

それは以前、グリフの魔法兵器の真相巣を探るべく、ゼルダと二人で人選をした時の判断理由。結局、彼女がその任に付く前に、婚約者として自分の手元に引き込んでしまったのだ。

その代わりに、ゼルダはグリフへ向かった……

「あたし、自分が遺り残した仕事をしに行きたいの。だから……殿下……お願い」

業と変えられた呼び方に、彼女の意思の固さがにじみ出る。もは

や少女は決断しているのだ。

「マイ……君はやはりそうするんだね」

小さな頤がこくんと頷くのが胸に伝わる。

「ごめん、セイル。……でさ、その前に……」

「君の申し出を受ける前に、婚約者にキスをさせてくれ」

我ながら切ない声だと内心で苦笑しながら、見上げてくる細い顎にそっと手をかける。

柔らかな唇に自分のものを重ねながら、セイルロッドは心の中で一つの区切りをつけていった。

「計画が決まったら、教えるね……」

そう言い残して私室を出て行く真維を、セイルロッドは微笑んで見送った。

椅子に沈み込み、深い溜息が漏れる。

未練がましい事をした。思わず苦笑が漏れる。

もはや時は動き出した。

ならば、自分に出来る事をしよう。自分が摘み取った人生を相手に返す。

それが為すべき事なのだ。

「ゼルダ……マイは動き出したぞ。頼む……生きていてくれ」

今はただ、親友の安否が心にかかる……

4.

初夏の日差しの中鮮やかなブーケが宙を舞う。

紺色のドレスに身を包んだ親友がそれを受け止めたのを見て、花嫁は鮮やかに微笑んだ。

「次は貴方の番でしてよ、マイ」

白い花嫁衣裳の公女は、亜麻色の髪の新郎と共に花を撒かれた道を軽やかに歩み、祝福のアーチをくぐっていく。

戦時下の不安を払拭する公女の婚礼は、これから二日間の祝宴で祝われる。日ごろの憂さを晴らそうと、カリストの王都は沸き返っていた。

今日の主役達は幸せを体現して、寄り添い微笑みあう。

何の憂いも無いかのように、二人が馬車の上から民へと手を振る。

心の中に硬く閉じた扉を抱えて、夢と笑顔で“本当”を覆い隠して、薄紅の花嫁が走り去っていく。

本来なら後続の馬車に乗るはずだった真維は、ブーケを見詰めながらそっと溜息を漏らした。

「お願いダイナ……あたしに、本当の答えを出ささせて……」

翌朝、馬車はひっそりと出発した。

馬車には三人。藍の魔道師、最高位の蒼を持つ邪眼の魔道師、そしてカリスト初の女騎士。

見送りもまた三人。公子、護衛を兼ねた騎士隊長。少年騎士。

未明の空の下、公子は真維にブーケを渡されて困惑した。

「マイ……私がブーケを貰って、どうするんだい？」

首を傾げるセイルロッドに、真維はにっこりとわらって見せた。

「だって、ブーケ貰ったら、速く結婚できるって言うじゃない」

常に見たいと切望していた陽だまりの笑みに、心の奥が微かに痛む。

「私は、当分花嫁を貰えそうに無いんだがね？」

つい漏らした皮肉に、一瞬ひるんだ少女は、それでも笑みを消さずにセイルロッドを見返した。

「ごめん、セイル。でも、わがままを聞いてくれてありがとう」

真摯な言葉にセイルロッドは首を振って微笑んだ。公子としてのロイヤルスマイルではなく。生地の青年として。

「君は、君の道を行くといい。それが一番似あっているからね」

「うん。必ず、ドジ踏んだボケナスを見つけてくるわ」

そういって笑う真維に、少年騎士のギルがにやりと笑う。

「ドジ踏んだボケナスって、ゼルダ様か？」

「あたりまえじゃん」

真維の答えを受けて、ギルが笑い出す。

何時ものように屈託のない笑い声が、別れの空気を吹き飛ばしてくれるのが、真維とセイルロッドにはあり難かった。

彼は近日、近衛騎士隊長レグナムに率いられて前線に向かう、その別れも兼ねた見送りであった。

しかし、少年騎士には、初陣への気後れは微塵も無いようである。

「ギルも、がんばって武勲を上げなよ」

激励に、しっかりと頷く姿には、もう以前の悪戯坊主の影は無い。一人の騎士がそこに立っている。

「まかしときな、グリフをカリストに一歩だって入れねぇよ」

レグナムに、なにやら指示を受けていたセリフィーが真維に歩み寄り、出発の時を告げた。

「お～け～いこっか」

明るい一声で一向は馬車に乗り込み、いよいよ本当の別れだと真維は窓外から見上げてくる公子を見つめた。

「クレイス、皆を頼むぞ」

セイルロッドの言葉に、邪眼の魔導士は静かに頷く。

「善処します」

相変わらずの返答に苦笑しつつ、渡されたブーケから黄色い花を抜き出して、真維の髪に飾った。

「お守りだ、持っていくといい」

怪訝そうな顔をする少女に、公子は微笑を深めた。

「その花の名前は“五月”というんだ」

今の月の名前を冠された花は、小さいが、鮮やかな日の光を思わせる黄色で、可憐というよりは、元気の良さを感じさせる。

「ありがと、セイル」

車窓から微笑む少女の頬に、祝福の口付けを落として、公子はそっと身を引く。

「では、お別れだ、マイ。行くが良い」

「うん、じゃあね」

出発の指示を受け、御者が手綱を振り、馬車は動き出す。

窓から首を出し、手を振りつづける少女に応えながら、セイルロッドは一人ごちた。

「さらばだ、マイ。きっとその花が君を守ってくれる……」

1.

「計画を確認しよう」

馬車で四日、最前線の北の砦に近づいた頃、クレイス・ラムダが二人の同行者に口を開いた。

「クレイ。これで何度目？」

いい加減あきれた声が真維から発される。

無理もない。

ここに来るまでの四日間クレイスは、事ある毎に計画の確認をしているのだ。

実際、彼が口を開いたら、それしか言わないのではないかというぐらいの頻度なのだから真維は食傷気味だ。

「失敗したら後は無いんだぞ。第一俺は、北の砦から先には付いていけないんだからな」

ぎろりと伊達眼鏡の奥から、翡翠の瞳が睨んでくる。

亜麻色の髪も緑の瞳も、顔の造作も同じなのに。アルマンディンとは正反対の険しい表情が双子だということを信じさせない青年。それがクレイス・ラムダだ。

ゼルダと並び、カリスト公国最高位の蒼の魔導士である。

高い魔力故に邪眼とまで呼ばれるその瞳は、精霊や幽界（かくりょ）の地まで見通すと噂される。実際彼は神殿や墓地を極端に嫌い近寄らない。眼鏡は余計なモノを見ないように、呪（まじな）いが掛けてあるのだという。

明らかに魔導士と判る彼には、グリフ国内に潜入する事は出来なかった。その為、北の砦からの後方支援に徹する事となる。

「一回失敗したら、何度確認してもおんなじだってば、第一計画っつーたって、あんたが北の砦でまってる。あたしとフィーがグリフに潜り込んでゼルダを探し出す。これだけじゃない」

呑気に言い返す元被保護者を、元保護者は更に睨みつけた。

「お前のとことん無謀な計画で、お前が勝手にドジを踏むのは構わんが、それに付き合わされるセリフィの身にもなってみろ」

クレイスの言葉に、真維はにやりと笑う。

「へぇ〜ほぉ〜」

「なんだよ」

楽しげに光りだした茶水晶に、邪眼の魔導士は眉を顰めた。

「さすがの朴念仁も、奥さんの事は心配かぁ」

落とされた爆弾に、青年の頬が朱に染まる。

「な……何言ってんだ！　俺は殿下からお前達を預かった責任が」

「まあまあまあ、むきになりなさんなって。そうだよねぇ、新婚さんだもんねぇ」

双子の兄、アルマンディンよりも数ヶ月早く、クレイスはセリフィスと結婚していた。エルド族という、思春期に性別が決まる特殊な種族の出であるセリフィスが、遅い分化で女性に固定するのを待っての結婚だった。

月毎に性別の替わる金髪翠眼の絶世の美形、な見習い騎士に翻弄される邪眼の魔導士が、仲間の話題になったのも良い思い出だ。

「お前なぁ、それとこれとは関係ないだろう！」

赤くなって言い募る良人を見ながら、同じように頬を染めた新妻がそっと声をかける。

「真維、あんまりからかわないで下さい」

もう一人の親友の困惑する姿に、ちろりと舌をだして、肩を竦める。

「ごめん……でもね、感謝してる」

不意に変わった声音に、二組の翡翠が真維に向けられた。

「嬉しかったよ、クレイとフィーが一緒に来るって言ってくれた時」

馬車の振動でずれかける眼鏡を直しながら、青年魔導士は苦笑してみせた。

「お前一人を放り出せるわけ無いだろう。それに……わざわざからかいにやって来る物好きな人がいなくて、俺も物足りなかったからな……」

彼なりに心配を表す、少してれた様子に、真維は微笑む。

「うん……そうだね。あのさ、クレイ、フィー。安心して。たとえ、どんなことがあったって、フィーだけは、絶対にクレイんとこに帰すから。あたしの我侭につき合わせるんだもの、絶対にフィーは守るから……だから…」

「真維、やめろ」

クレイスは座席から腰を浮かせて真維の肩を掴み、言葉をさえぎった。

「守るだの、帰すだの、お前はセリフィを馬鹿にしてるのか？　たとえ魔法が使えなくとも、セリフィは騎士だ。こいつは、自分の身ぐらいは、自分で守れる。たとえ一人になっても、自力で帰ってこれるだけの頭もある。こいつがグリフに行って、帰ってきたのを知っているだろう？　何をしに一緒に行くと思ってるんだ？　お前の手伝いをする為だぞ、お前に守られる為じゃない、足手纏いになるんなら、行かない方がマシだ」

きつい物言いだが、気負い過ぎるな、という気遣いが感じられて、真維は泣き笑いのような顔になった。

「クレイ……」

「第一、前にも言った筈だぞ、魔導士の言葉には力が篭る。死にに行くような言い方はするな」

そう言い放ち、座席に直る。だが視線は真維を見据えたままだった。

真っ直ぐな翡翠の瞳に、優しい光が篭っている。

ぶっきらぼうで無愛想な青年は、本当は双子の兄と同じくらい優しい心を持っていた。ただ、表す方法を知らないのだ。

真維はそれをよく知っている。魔法実験の失敗で召喚してしまった責任を取るとして、自分の後見を買って出てくれた。元の世界へ帰る方法を必死で探してくれたし、その助けになるだどうと魔法の教育も手ずから指導してくれた。（ただし、ハンパないスパルタだったけれど）

セリフィスとの恋すらも、自分への責任が済むまではと、後回しにして……死にかけた。

不器用で優しい元保護者。

じわりと、喉の奥が熱くなる。こみ上げてくる涙をどうにか飲み込んで、真維は大きく頷き、再び満面の笑みで二人に向き直る。

「そだね、ごめん。じゃあ、二人とも、よろしく頼むわ」

業と軽い口調で言えば、むすりとしたまま、クレイスが頷いた。

「はじめからそう言えば良いんだよ」

「真維、がんばりましょうね」

セリフィスに微笑み返し、再び元保護者を見ながら、真維はしみじみと首を振る。

「それにしても、クレイって……お父さんみたいだねぇ」

再びの爆弾投下に、ラムダ夫妻は真維を凝視した。

「え゛？」

「だって、元保護者だしぃ。あ～、でも三つしか違わないから、お兄ちゃんか」

真維は自分の思いつきが気に入ったらしく、指を折って年を勘定してはけらけらと笑い出す。

クレイスはさも嫌そうに眉を寄せる。

「騒動しか持ち込まん、お前みたいな妹は願い下げだ」

「あ、ひっどぉい」

口を尖らせる真維に、セリフィスがくすくすと笑い出した。

「私は、真維なら何時でも妹になって欲しいです。あ、でも、娘でも良いかも……」

「セリフィ？！」

目を剥く良人に、彼女は鮮やかに微笑んでみせる。

「だって、真維は可愛いですから」

「おまえなぁ……」

クレイスが溜息をつくのと、真維が歓声を上げてセリフィスに抱きつくのとが同時だった。

「キャー、フィー！　嬉しいっ」

華奢な体で、やはり細身の少女を抱きとめて、セリフィスは目を細めた。

時々見せる妻の実に男らしい表情に、自分に出会わなかったら絶対男になっていたのではないかと、クレイスは思う。

緑一点の男の思惑なぞ何処吹く風で、女たちは勝手な相談をはじめていた。

「じゃあさ、あたしが娘だったら、何時産んだのかな？」

「そうですね。クレイ、何時にしましょうか？」

緊張感の吹き飛ぶ言葉に、クレイスはがっくりと肩を落とした。

「勝手にしろ……」

2.

北の中央砦は、グリフ国境を望む要衝である。

この砦から僅か北へ数キロの谷に国境線が敷かれ、更に数キロ先にはグリフ側の砦が置かれている。

グリフの魔法兵器の実態を探るべく、真維達はここに来た事があった。

奇襲に見舞われながらもどうにか捕虜を得て、結果は上首尾に終わりゼルダや公子を喜ばせたものだ。

因みに、その作戦で魔法院と騎士団が協力したのが、クレイスとセリフィスの馴れ初めとなったのは余談である。

作戦後に保護した難民の少女から得た情報で、魔法兵器の製造工場の場所が判明した。その現状を確かめるべく、単身グリフに潜入したセリフィスが持ち帰った情報により、魔法兵器製造の悲惨さが浮き彫りにされた。

母の安否を問う少女のたっての願いで真維はグリフに行く予定だったが、それが決まった直後に、セイルロッドの求婚を受け、国内に留まざるを得なくなった。

代わりにゼルダ・カドフェルが少女を連れ、グリフに向かったのである。

ゼルダの姿が最後に確認されたのもこの砦であり、彼はここから

旅立ち消息を絶ったのだ。

一年半振りに訪れた砦は、物々しく武装した兵士達が、北の国境線を睨みつつ警戒を強めていた。

駐屯している部隊の数も格段に増え、激しい攻防戦に何度も見舞われたらしく、砦の外壁には幾つもの魔法攻撃の残滓が生々しく残っている。

ここが最前線なのだと、肌で感じる。

今は小康状態といえたが、何時本格的な戦闘がはじまらないとも限らないのだ。

そんな場所で、クレイスは一人。真維達を待つ事になる。

砦で一日かけて準備を整えた翌日。

夜明けを待たずに二人は出発した。

門外まで出て二人を見送るクレイスに、セリフィスは心配そうな目を向ける。

揺れる妻の瞳に、クレイスは苦笑で答えた。

「何て顔してる。俺は蒼を拝領している魔導士だ。ここに派遣されているどの魔導士より魔力は高い。戦闘があったって、自分の身位は守れるさ」

安心させるようにわざと言葉を連ねる良人へ、セリフィスはそっと頷く。

「貴方の力は信じています。私が心配なのは、砦の事です」

意味が解らず首を傾げる良人に、新妻は微かに頬を染めて囁くような声を出す。

「砦の部屋は、全て石造りで……あの。夜、一人で寝る時、冷えるのじゃないかと……」

「……何言い出すんだ、お前？」

いきなり妙な事を言われて、クレイスは当惑した。

セリフィスも、自分の言葉がどう取られたのかに気が付いて慌てて首を振る。

「え？　あ……い、いえ、そういう意味じゃなくて……」

夫婦の会話というものは、傍で聞いていて嬉しいものではない。

ましてやこっちが独り者となれば……居たたまれない事甚だしいわけで。

真維はさりげなく荷物を抱え、なるべくさりげなく二人に声をかけた。

「いっけなーい、あたし、忘れ物してきた、ちょっと戻るね」

たいへんたいへん。などと呟いて、二人が返事をするまもなく門の中に駆け込んでしまう。

その後姿を見送って、クレイスは微かに苦笑する。

昔、似たような気の使い方を別の人からされた事がある。普段は執拗にからかうくせに、何かにつけてさりげない気遣いをしてみせる。優しいペテン師の姿が真維に重なって見えた。

職業柄もあるのだろうが、真維は彼の人物によく似ている。どこがと聞かれれば返答に困るが、敢えて言うならは精神(こころ)の強さや在り方かもしれない。

思えば、妻と結び付けてくれたのも、真維とゼルダだった。二人が居なければ、今の自分は無いだろう。

同僚の策謀で失敗に陥った魔法実験が思い出される。

壊れた魔法陣が呼び出した、凶悪なドラゴンの息吹で焼かれた身体、肉を裂いた爪。

即座に受けた治癒魔法でさえも、焼け石に水といった有様だったと兄から聞いた。

そこまで瀕死の大怪我を追いながら、頑なに転地療養を拒んでいたのは。ドラゴンの炎を恐れもせずに助けに来てくれたセリフィスの姿が、頭から離れられなかったから。

真維を還す方法を見つけないとだとか、戦争目前なのに仕事は放

り出せないだとか。ろくに意識も保てないくせにあれこれ言い訳をする本心は、セリフィスの心が知りたいからだった。ただそれだけに固執していた大阿呆に、二人が確かめる機会を作ってくれた。

それがなければどうなっていただろう？

意地を張ってそのまま命を落としたか。怪我を理由に、養生先の田舎に引きこもったままか。そんな程度に違いない。

間違いなく、こうして愛しい者の視線を受け止める事はできなかった筈である。

だからクレイスは、赤くなってしどろもどろになっている妻をそっと引き寄せた。

「く……くれい？」

驚く妻を胸の中に包み込んで、邪眼の魔導士は低く笑う。

「いったい何が言いたいんだ、セリフィ？」

路上であるのを気にして身を硬くしたセリフィスは、肌に馴染んだ温もりに促されて、クレイスの肩に顔を埋める。

細い腕がおずおずと背に回され、左手が何かをなぞるように動かされる。

「私が心配なのは……砦のなかで体を冷やしたら。この傷が、また痛むのではないかと……それが気になって……」

クレイスの右半身には肩から足にかけて、引きつりケロイドになった傷痕が生々しく刻まれていた。

ドラゴンの爪で引き千切れかけた腕や壊死すら始まっていた足は、半分以上肉の削げた歪な傷跡を曝してはいたが、妻の手厚い看護によって再び大地を踏んでいる。

だが完治はしたものの、季節の変わり目などには時折ひどく痛む。

セリフィスはそれを案じているらしい。

妻の気遣いが嬉しくて、クレイスは腕に力を篭めた。

「気にするな、寒けりゃ誰かに頼んで毛皮でも貰うさ。それに暖炉もあるしな」

「はい……」

ようやっと力を抜いてきた体が愛しくて、クレイスは微笑を深くしたまま妻のぬくもりを楽しんでいた。

頭の隅で、夜明け前の薄暗さをあり難く思う。

「あの……クレイ。そろそろ行かないと……夜が明けてしまいます。マイを呼んで来ますね」

さすがに時間が気になりだしたセリフィスが、腕の中で身じろぎ始める。

クレイスは少しだけ身体を離して、鮮やかな緑の瞳を覗き込んだ。

今朝のセリフィスは、グリフ潜入の為に、髪を黒く染めている。

人間の数倍の魔力を持ち、金髪に翠眼か碧眼。目も覚めるような絶世の美貌に加えて、思春期までは月単位で性別が移ろう。それが美神の末裔（すえ）と云われるエルド族の特徴で、性別を固定するには恋をする事。妻が自分に向けてくれた想いだ。

魔導士狩りをしているグリフは、当然魔法に秀で魔力の高いエルド族も狩っていた。

たとえ突然変異で魔法が一切使えないとはいえ、エルド狩りの本場に当のエルド族が乗り込むのだ、特徴である金の髪は悪目立ちしすぎるという事で、烏の濡れ羽色で艶かしく染め上げた。

だが、この変装は失敗だったかもしれない。なぜなら、水準以上の容姿が、黒い髪に縁取られることで更に際立ち、そのうえ、翡翠の瞳が黒髪に映え過ぎる。

エルド狩りの魔の手は逃れても、邪な輩が寄ってくるかもしれない。

そこまで考えて苦笑する。

その邪な輩を片っ端から叩きのめしていく妻の姿は、実のところ王都名物の一つなのだ。

彼女の能力を信頼しよう。

それができる相手だからこそ、自分の心を捉えて離さないのだか

ら。

「クレイ。どうしました？」

小首を傾げる妻に、そっと顔を近づける。

「マイなら、気を利かせてくれたんだよ……少しだけ、甘えることにしよう」

自分も随分変わったものだ。頭の隅で苦笑しながら、ゆっくりと、妻の唇に、口付けを落とした。

「まったく……見せ付けてくれますねぇ」

門の内側で様子を伺いながら、真維はニヤニヤと一人ごちた。

良識人の夫婦は、人前では滅多に互いの愛情を表したりしない。見詰め合うだけで全てが通じている、と言わんばかりに、行儀良く離れてしまう。

普通ならそれで良いだろう、だが、今回はどちらも危険の前に身を曝して、次に会える保証すらないのだ。珠には後朝の別れとやらをしてみても罰は当たらないだろう。

まあ、その為には周りでお膳立てをしてやらないとならないのだが……

「難儀な夫婦だよね」

口では文句染みたことを呟きながら、自分の思惑に満足して頬が緩む。ぶきっちょ夫婦のお膳立てをしては覗き見したりからかったりするのは、彼女の趣味の一つだったりするからだ。

「マイ殿？」

にやつく背後から不意に名を呼ばれた。

「うき？」

思わず奇声を漏らした真維が慌てて顔を引き締めて振り向くと、砦の責任者である士官が立っていた。奇声に関してはスルーしてくれるようなので、とりあえず姿勢を正して向き直る。

「なんでしょう？」

出発の報告はしたはずだがと首を傾げる真維に、士官は緊張した面持ちで歩み寄った。

「たった今、鳩の知らせがありました。お耳に入れておいた方が良い事なので……」

簡素簡潔を旨とする騎士の珍しく言いよどむ姿に、嫌なものを感じて眉を寄せる。

「何？　教えて」

辺りを憚るように耳打ちされた言葉に、真維の眉間は更に皺を深くした。

2.（後書き）

クレイの脳内のろけでした（＊´ー｀）

3.

グリフとの国境線を越えるには、二種類の方法がある。

北の中央砦から伸びる街道を行き、あちらの砦に作られた関所を通る方法。

戦時下の現在。そこが通れるはずも無い。

したがって、真維とセリフィスは、街道や砦を大きく迂回する、森を突っ切る道を選ぶこととなる。

道といっても獣道である。

近隣の村娘といった地味な姿に身を窶した二人組みは、どちらも慣れない長いスカートと藪との攻防戦に、苛々しながら進んでいた。

「ったくもう、何だってみんな、こんな長いスカート履くんだろうね」

何時もは、こだわりのミニスカートという軽装の真維が、ぶつぶつとぼやいている。

「もう少しです、森を抜ければ、迎えがいるはずですから、あ痛ッ」

慰めを口にするセリフィスが、小枝に髪を絡めて悲鳴をあげる。

その姿に力なく笑ってみせて、真維は眉を顰めた。

「迎え……居ないかもしれないよ」

意外な言葉に、小枝から髪を取り戻そうとしていた女騎士の手が止まる。

「え？」

「さっきさ、砦の隊長さんから、知らせを受けたの」

夜が明けかけた薄暗がりの中、トルマリンの瞳が不吉な光を放つようだ。魔導士になってからの真維は時々こんな目をする。

その姿に、もう一人の、琥珀の瞳の魔導士が重なる。

『世の中に、背中を預けられる剣士が三人居るが、お前はその一人だ』と言ってくれた魔導士。彼が時折見せていた闇に融けるような不吉な雰囲気を、何時の間にか真維も発するようになっていた。

「どのようなことですか？」

いやな予感を抱きながら、真維に問い掛ける。

女魔導士は小さくため息をついて、覚悟を決めた。

「アルムが、処刑された」

「な……なんてこと……」

手にしていた小枝をぱきりと折り取り、セリフィスは真維に向き直った。

「何時です？」

「四日前らしいわ。どうも、味方の裏切りで、アジトを急襲されたらしいの。捕らえられてから、公開処刑まで、たった二日だったそうよ」

アルムとは前グリフ国王の遺児、アルムレイド・ルーラッハ・グリフの事である。叔父である現国王によって父王を暗殺された上、無理やり廃嫡させられた彼は野に下り、地下に潜って現体制を覆すべくレジスタンス活動に身を投じていた。

彼はカリストに援助を求め、セイルロッドは密かにレジスタンスの後押しをしていた。同盟と呼ばれた密約の席に真維もまた筆頭魔導士代行として列席し、儚げでありながら強い意志に裏打ちされた青年と言葉を交わしている。

以来、欠かすことなく連絡を取り合い、セイルロッドの細作の手助けも、彼らが受け持っていてくれた。

今回の潜入に関しても、レジスタンスの協力が不可欠であったのだが。その主格であるアルムレイドの刑死は、計画の大半の瓦解を意味していた。

「替え玉という事は無いのですか？　アルムレイド殿下は、機転の利かれるお方です」

セリフィスの言葉に、真維は苦笑しながら首を振る。

「だとしたら有難いんだけどね。確認は取れてないけど、思いっき

り本人っていう線が濃厚らしいわ。それにもし迎えがきていたとしても、裏切りがあった限りは信用できないって事よ」

衝撃を飲み込むために、セリフィスは大きく息を吸い込んだ。次にゆっくりと吐き出し、下腹に力を篭める。

レグナムに叩き込まれた、平常心を取り戻す方法である。

顔を上げた時には、翡翠の瞳には動揺の色は消えていた。

「マイ、戻りますか？」

違う答えを確信している問いかけに、真維もまたにやりと笑って首を振る。

「これって、あたし等にとってはピンチだけど、チャンスでもあるわ」

ゆっくりと歩き出す。セリフィスがそれに続く。

「彼が処刑された事で、グリフはレジスタンスの報復を警戒していても、どこかで安心している筈よ。かなり惨たらしい公開処刑だったらしいから、これで抵抗する気力が減るだろうってね。アルムには悪いけど、この機に乗じさせてもらうわ。それに、単独のほうがあたし等の素性がばれ難いから動きやすいとも言える」

足の調達がちょっと厳しくなるけど、やるっきゃないでしょう。と笑う真維の姿に、セリフィスは思わず呟いた。

「マイ、貴方は、ゼルダ様に似てきましたね」

これには顕著な反応が返ってきた。

「えーっ？　あのスチャラカに？　やめてよね、縁起でもない」

さも嫌そうな声を出しながらなんとなく嬉しげにみえるのは、薄暗がりの光の加減でもなさそうである。

「とにかく、この森を抜けましょう。王都までの足は、どこかで調達する事ができるでしょうから」

「うん」

しっかりと頷きあって、二人の少女は再び藪と格闘しだした。

「クレイの奴今頃、砦の隊長さんからこの知らせ聞いて無茶苦茶心配してるんじゃないかな？」

最後に与えられた抱擁と口付けを思い出し、そっと頬を染めながらセリフィスも小さく笑う。

「そうでしょうね。同行できない事を、悔しがっていましたから」

真維の返事は暢気である。

「しょうがないよ。クレイには、あそこに居てもらわないと困るんだもん」

「そうですね」

藪に向かって、盛大な罵声を浴びせ始めた真維に微笑んで、セリフィスはそっと北の砦を振り返った。

――クレイ、行って来ます。

――ああ、待っている。

――はい……

別れ際の言葉が心を支える。

「必ず帰ります。クレイ」

誰にも聞こえないよう、セリフィスはそっと呟いた。

部隊長からの知らせを受け、クレイスは北の砦の門前に出てきていた。

黎明の中、二人が居るであろう国境の森が、黒々とした闇の溜まり場に見える。

旅は初めから、二人の少女に試練を与えてきた。おそらく進むに連れて困難は大きくなるだろう。

動けぬ自分が歯痒い。

しかし、半ば不具の身体では足手纏いにしかならないだろう。

右手では重いものは持てず、軽く引き摺る右足は歩く分には支障の無いものの、走る事は適わない。

事此処に至っては、それぞれができる事をするしかないのだ。

「二人とも、帰ってこいよ……」

搾り出すように呟いて、クレイスは色砂の入った袋を取り出した。

魔導士が魔方陣を描く時に用いる砂である。

袋の金具を開けて砂を少しずつ地面に落としながら、口の中で呪文を組み立て始める。

邪眼の魔導士は気を集中させつつ、砦の周りに呪法を掛けていった。

1.

グリフに輝く筈であった一つの大きな星は、衆俗の眼前に引き出された。

王族への畏敬など欠片も持たぬ手で打ち据えられたうえに、国家反逆の罪状を読み上げられる。しかし彼は毅然と前を見据え、刑吏の圧抑を物ともせずに言い放った。

「我が民よ、グリフの民よ。王の暴挙に屈服するな。己が道、己が信じる最善の道を進め。そして、自らの誇りを捨てず、自由を掴み取れ！！」

まさにグリフの正当な世継ぎとしてのその姿に、貴き血筋を卑しめる為に下された残虐な仕打ちに。集まった者達は一様に涙した。

黄金の髪の王子に下された刑罪は、『鋸挽（のこぎりびき）』

下層の者に処せられる極刑である。

刑具に縛り付けられて路上に置かれ、道行く者達に生木の鋸で首を挽かれる。切れぬ鋸で少しずつ喉を裂かれる事による壊死や失血は緩慢で苦しみも深く、死に至るまで十数日掛かる。

あまりの惨（むご）さ故、先代の王の治世には廃止されていたものであった。

その刑罰を、仮にも甥である前王の遺児に下す。

グリフ王のなんという悪逆非道。民衆は恐怖と共にやるせない憤りを感じていた。

それが為、刑の執行が宣言されても、誰一人としてざわめきの波の中から前に出る者は居ない。

皆一様に尻込みし、高貴なる者への冒涜者となるのを恐れた。

しかし、既に刑は宣言されている。このまま誰も鋸に手を触れなくとも、既に死人とされた王子が刑具から解かれる事はない。

水も、食料も与えられぬまま、曇天の空の下餓えと乾きによって死んで行くのを待つだけなのである。

いや、それよりも、業を煮やした刑吏達によって辱めを与えられ、死に至る事になるかもしれない。

閉ざされた未来を見据えるように、王子は静に民衆を見詰めていた。

そんな王子の前に、一人の女が歩み出た。

深く被ったマントのフードに顔を隠し、民衆の罵声を浴びながらも、刑吏から鋸を受け取る。

そして初めの一挽きをするべく近寄る女に、王子は優しい笑みを浮かべて頷いた。

「頼む」

これが、彼の最後の言葉である。

王子の言葉を受け、女はフードを跳ね上げた。

金の髪、鮮やかな緑の瞳。

明らかにエルド族の特徴を持つ美女は鋸を投げ捨てると、隠し持ったナイフを振りかざし一気に王子の喉首を掻き切った。

撒き散らされた血潮に驚愕の悲鳴が放たれ、制止しようとする刑吏の怒声が乱れ飛ぶ中、女は王子の血に塗れたナイフを自分の心臓に突き立てた。

「お供します」

女はそう呟いたという。

せっかくの見世物を台無しにされたグリフ王は激怒した。

事切れた王子と女の遺体をそのまま広場に打ち捨てさせ、王子の首だけを切り取って長い槍の穂先に突き刺し、遺体の側に高く掲げた。そして、『それらが腐るに任せよ』と下しおいた。

絶える事のない遠雷の響く暗い空の下、群集が遠巻きに見守る中。曝された王子の首と二人の遺体は、兵士達に監視されて近寄る事すら侭ならない。

死してなお辱めを受ける王子に、人々は再び涙した。

しかし、四日後。

広場に落雷が落ちた。

軽い混乱を収めた兵士達が、遺体と首が消えていることに気がついた。

首があったはずの穂先には、代わりに一枚の書状が刺されてあり風に揺れている。

そこには、こう認めてあった。

『我等が真の王を返して貰う』

折りしもその日、真維達は国境を越えた。

1．（後書き）

黄金の日々、見た事ありますか？痛そうですよね。あれ。五右エ門の油揚げとか。昔の刑罰は痛そうで怖いです。

2.

昼なお暗い曇天の下。グリフの王城はそびえている。

グリフ国内に入ってから、太陽の姿は厚い雲の向うだ。

天候は常に荒れ、遠雷の途切れる事は無い。

荒れ果てた国内に負けず劣らず、グリフの王都も荒廃の影に覆われている。

重層な落し扉を見上げながら、真維はゼルダが連れて行った少女のことを思い出していた。

唯一安心できる人だと、縋り付いてきた少女。

エルド族の子供であったから、厳密には少女ではなかったが、『お姉ちゃん』と呼びかける姿は可愛らしく、妹のように思えた。

必ず母親を助け出すと約束したのに、結局はそれを反故にしてしまった。

悪い事をしたと思う。

ゼルダが行方をくらました後、少女はどうしているのだろう。ひょっとして、共に王城の地下に捕らえられているのだろうか？

エルド族は子供であっても容赦なく狩られているらしい、今頃、

どんな目に遭っている事か……そういえば、名前すら聞いていなかった……

ゼルダを見つけ出す他に、少女を見出す事もできるのだろうか？

自分にそれほど力があるだろうか？

真維は足元に視線を落とした。

煤けたスカートが情けない。自分の無謀さ加減を嘲笑っているような気がする。

自分ならゼルダを見つけ出せる、そう確信してここまで来た。それは思い上がりなのだろうか？

王都に着いて既に十日。

アルムレイドの刑死に続いての試練は、捜索計画の要ともいえる場所にあった。

あてにしていたのは、以前の潜入操作でセリフィスが難民の少女の情報で潜った抜け穴。しかし前には兵士が立ち、入る事は不可能になっていた。

ゼルダが捕えられているのなら、おそらくは地下牢。そして、他の魔導士やエルド族、例の大樹なるものも、王城の奥深くに在る筈なのだ。

潜り込めなければ、何も出来ない。

他に王城地下に入るルートは無いものか、真維達は手を尽くして

都の中を捜しまわった。

だが、土地鑑も無く、協力者もいない状態では、焦る気持ちとは裏腹に、捜索は遅々としてすすまない。

こんな自分をゼルダが見たら、なんと言うだろう？

そう、きっと……

「な～に黄昏てんのよ、この阿呆」

呟いて、真維はぐいと顔を上げた。思い上がりだろうが何だろうが、ここまで来たのだ。前に進むしかない。後ろに下がる道は、自分で閉ざしてきた。

「おっしゃ！」

一つ気合を入れて、真維はくるりと城門を背にした。

勢いよく歩み去る茶髪の娘の姿を、黒い双眸が見詰めている。

そっと木陰から姿を現したのは、１１～２才の少女であった。

艶やかな黒髪に、白い肌が鮮やかに映える。あと２～３年後の姿が、かなり期待できそうな美少女である。

小首を傾げると、腰のあたりで一つに括った黒髪が、肩に当たってさらさらと音を立てた。

細く長い腕を組んで、暫し考えるような仕草をとり、再び真維の後姿を見詰める。

その黒い瞳は、瞳孔と同じくらい黒い虹彩で、一瞬ただ黒いだけに見えるほど神秘的であり、小作りにまとまった顔つきは可憐であった。そして、花弁のような薄紅の唇は、にやりと、歪められた。

3.

気合いを入れなおした真維が繁華街まで戻ってくると、なにやら騒がしい喧騒に包まれていた。

「いいぞ、ねーちゃん」

「やれ！やれー！」

人だかりになった場所から、そんな野次が飛んでくる。

「まさか……」

嫌な予感に眉を顰め、小柄な体を最大限に生かして、人の森を抜けると。

ガッシャーン。

陶器の砕ける音と共に、男が宙を舞う。

どさりと落下した場所は、丁度真維の目の前だった。

観衆の哄笑を浴びつつ、白目を剥いた男は、実に人相が悪い。

その上みすぼらしく、いかにも日雇いの労働者といった風情のむさい男だ。

泡を吹いて涎を垂らした口からは、濃厚な酒の匂いが立ち上っていた。

最近頓に増えたらしい、流れ者の一人なのだろう。

グリフ国内は、魔法兵器製造のあおりをくらって天候が荒れ、各地で天災の被害が出ている。当然住む土地を追われ、流民となった人々は、次第に職を求めて王都に集まり、王都周辺には、貧民窟のような流民村が形成されていた。

行政府は各地の人の流れを止めるために、国内の移動にも鑑札を発行し、それを持たない者の移動を禁じてはいたが、ほとんど焼け石に水の状態で、蟻が群がるように流民達は王都に集まってくる。それにつれて、窃盗、強盗なども頻発し、王都の治安も次第に悪化している。

スラム化は、下町に行くほど酷くなり、真維達が宿を取る繁華街周辺では、自警団すらも形骸化しかけ、不逞の輩が我が物顔でのし歩く、乙女が歩き回るには、不似合いな場所となっている。

だが、逆に言えば、余所者が潜り込むには最も楽な場所でもあるのだ。

真維達は、身寄りを無くし、田舎からやってきた姉妹。そんな風情でこの街に溶け込む事が出来ていた。唯一の弊害を除けば……

「あちゃ～。またか……」

額を押さえ、男が飛んできた方へ、恐る恐る顔を向ける。そして、素っ頓狂な声をあげた。

「ガウ姉?！」

すらりとした長身に、流れるような黒髪の美女が、埃を落とすように両手を叩き合わせている。

「あら、真維。お帰りなさい」

花の顔をほころばせ、至極優しい口調で語りかけてくる彼女の後ろから、怒りに赤黒くなった男が踊りかかる。

「ちょっと待ってちょうだいな」

柔らかな声と共に、肘鉄が男の鳩尾に叩き込まれた。悶絶して空を切る右腕を捕え、腰をひねって担ぎ上げると、その勢いを利用して投げ飛ばす。

教科書に載りそうなほど見事な一本背負いである。

重なり合って伸びた男達を確認して、観衆が一気に盛り上がった。

やんやの喝采のなか、ガウと呼ばれた黒髪の女は優雅に一礼して観客へ微笑み、サービスに喜んだ野次馬から御捻りまで朕で来た。

遠慮なく広げたエプロンへ、チャリチャリと臨時収入が集まっていく。

「ち……ちょっとこっち来なさいよ！！」

痛む頭を抱えながら、真維はエルの腕を掴んで、彼女が出てきた店の中へ駆け込んだ。

店の外からは、伸びた男達へ浴びせられる観衆の嘲りと、ショーの終わりを残念がる声が聞こえてきたが、真維は構わず店の奥へと入っていく。

「ガウちゃん終わったかい？　あ、マイちゃんおかえり」

店の女将が帳場から顔を覗かせる。

「おばさん、ただいま。ガウ姉借りるね」

「いいともさ、これで暫く静かだろうから」

人の良さそうな女将がニコニコ笑うのに一礼して、真維は階段を駆け上がった。

食堂の上に宿屋がある、よくある造りの街宿で、真維達三人は、姉妹として一部屋を借りていた。

自分達の部屋の中にエルと共に飛び込むと、やっと腕を開放された黒髪の美女が、小さな溜息をつく。

「どうしました？　マイ」

そんな女に、真維は盛大な溜息で応酬した。

「どうもこうも無いわよ。何してるの？」

呆れ声に、女はきちんと背筋を伸ばす。

「当然の報いよ。酔っ払って婦女子に絡むなど、まともな殿方のす

る事ではありませんわ」

当たり前、という顔の女に、真維は肩を落とした。

「んじゃあ、質問変える。何したの、あいつら？」

これには顕著な反応が返ってきた。怒りを含んだ青い瞳がひたと真維に注がれる。

「あの不埒者共は、酔っ払って絡んできただけでなく、セリフィーのお尻に触ったんです！　！許さ無いわ、絶対に。セリフィーに触れていい殿方は、世の中に一人だけよ」

それだって、本当は許したくないのに、と、拳を握り締めて息巻く美女に、真維は更に脱力した。

「なるほど、確かに、あんたが怒るはずだね……」

弊害というのはこれである。

余所者が溶け込みやすいのは確かなのだ。現に、素性すらしかとは判りもしない女三人を、鑑札があるという理由だけで、この宿の女将は何の疑いも無く受け入れ、言い訳の、仕事を探しに来たと言う言葉をそのまま受け取って、定職が見つかるまでと、宿や食堂での用事を世話してくれていた。

女将の人柄に甘えて、丁度いい隠れ蓑として働いているのだが、飯屋には付き物の酔っ払いや、性根の悪い輩が、何かとちょっかいをかけてくるのである。

水準以上の娘が三人も揃っているのだから、当然といえば当然なのだが、これに激烈に反応したのはセリフィスである。
もともと正義感にあふれ、女騎士としてカリストの治安にも力を尽くしていた彼女なのだ、そして、仲間を守るという使命感にも燃えている。

故に、真維やガウディアに言い寄ったり絡んだりする連中は、悉く彼女によって排除されていた。
ところがおかしな事に、自分に対しての悪戯には結構我慢強いのだ、なにをされても微笑んでやり過ごそうとしてしまう。

だが、今度は反対に、セリフィスの事となると黙っておられないのが、目の前にいる美女であった。

ガウディアというのが長い呼び方だが、彼女は実の所、カリストの女神官であり、その正体は、元グリフのスパイ兼刺客である。

今はダイナの良人となったアルマンディン・ラムダが、帳簿改竄の陰謀に巻き込まれたとき、グリフ側の間者の監視と後始末を請け負っていたのが彼女であった。

通称白鴉。卓越した殺人技術と攻撃魔法を操る暗殺者。あでやかな銀髪の女という以外、その素顔を見た者は一人も居ない。

セリフィス・ラムダ。いや、当時のセリフィー・ノアトゥンのほかは。

正体を見破られた彼女には、二つの道があった。

一つはセリフィーを殺し、請け負った任務を遂行すること。

一つは観念し、間者として縛につくこと。

しかし、セリフィスは第三の道を示した。心穏やかに、カリストの者として暮らす事。

この時、白鴉はこの世から消え去った。

セリフィスは、敬愛するレグナムにすら彼女の正体を明かさず、その心意気を受けて、ガウディアは、半ば崇拝に近い友情を抱いている。

今回、セリフィスが真維に同行し、グリフ潜入をすると聞くや、一足先にグリフへ入り、どう渡りをつけたものか、しっかり鑑札や手形を用意して、国境の森の入り口で待っていたのである。

以来三人で旅をしてきた。

その間のガウディアのセリフィスへの傾倒ぶりはものすごく、お揃いで染めた黒髪とあいまって、外から見るなら妹思いの美しい姉なのだが、間近で見ている真維には、『悪女の深情け』という言葉が浮かんでくる。

あの日雇い労働者達は、触れてはならない逆燐に触れたのだ。

「気の毒に……」

真維はがっくりと肩を落とした。

もはや何も言う気にならない。

初めの内こそ、敵国に潜り込んだ工作員なのだから、もう少し穏便にとか、目立たないように、などと二人に注意していたのだが、そんな事はガウディアの方がずっとエキスパートなのだ。

目立たぬ者静かな者が、間者の取るもっとも多い姿である。現に、少しでも頭のある捜索者ならば、まず真っ先にそういう者を狙って絡め取る。

ならば、最も目立つ者、騒がしい者、何処に居ても目を引く者ならばどうか？　これも疑惑の対象となる。細昨や間者には、大道芸人に成りすます者も多い。

しかし、街の中のちょっとした人気者。程度であれば、奇妙な事にそれほど目立たないのである。

現に、三人は宿屋の腕っ節の強い看板娘としてこの界隈では名を馳せはじめていたが、戦争に忙しい軍隊は、レジスタンスや間者を警戒してはいても、三人の娘の顔を憶えようとはしなかった。

結局、餅は餅屋である。

真維はガウディアのする事に、文句を言うのは止めていた。

ついでに真維も、護身用に持ち歩いているフライパンで、ごろつきを３・４人撃退しているのだから、強い事はいえない。

「それで……今日はどうでしたの？」

一段声を低めて、ガウディアが訊ねる。真維は肩をすくめて首を

振った。

「そう……ごめんなさいね、真維」

自嘲気味の溜息が漏らされ、ガウディアは窓辺へと歩み寄った。

鎧戸の隙間から漏れる、細い光に目を落とし、溜息混じりの声が出る。

「わたくしが、もう少しグリフのことに詳しければ、貴女方にこんな苦労をさせはしないのに……」

元間者とはいっても、白鴉はグリフの者ではなかった。

暗殺と情報収集を請け負う特殊技能者として、グリフと契約を交わしていただけなのである。もう一つ正確にいえば、グリフの有力貴族が、個人的に白鴉と契約していたのであって、グリフ自体とはまったく関係ないともいえた。

その貴族も、もうこの世には居ない。

以前の繋がりを利用して、鑑札と手形を手に入れはしたものの、王都の中の地理に関しては、ガウディアも真維達と大差がなかった。

「役に立たなくて、ごめんなさいね……」

謝る年上の女性に、真維は何時ものあっけらかんとした笑顔を向ける。

「気にしない気にしない。なんとかなるって。それにさ、ただ無駄

骨だったわけでもないのよ」

「何か、ありましたの？」

茶水晶の瞳が悪戯っぽい光を帯びる。

「ま、ね。大した事じゃないんだけど、面白い噂を聞いたの」

言いつつ真維も窓辺に歩み寄る。

鎧戸に手を掛けて思い切りよく押し開けると、夕暮れ間近の心地よい風が吹き込んでくる。

窓にガラスも入らないような安宿であるが、三階にあるこの部屋からは、城下町が見渡せ、初夏に向かう季節にはありがたい涼風が与えられている。真維は結構この部屋を気に入っていた。

「えーと、東西南北……あっちだ」

四方を確かめてから、真維は東の方を指差した。

「あちらは、山の手の方ね」

「うん」

半山城であるグリフ城がそびえる山腹から、二重の城門を経て、貴族達の住む一の郭、さらに大きい城門を通って、城下町の大通りや、煩雑な町並みが屋根の波に沈んでいく。

マイが指差したのはその波の向こう、爪先上がりに小高くなって

いく丘に点在する瀟洒な館が集まる地域であった。

「どんな噂ですの？」

邸宅群を見ながらガウディアが問う。

「お化け屋敷だって。面白そうだから、見に行こうよ」

可愛らしく首を傾げてみせる少女に、黒髪の美女も微笑み返した。

「いいですわね、セリフィーも誘いましょう」

「うん」

マイが頷いた時、軽いノックの後にドアが開かれた。

「真維、コル……じゃなかった、ガウ姉。お店が込んできたので、お願いしますって、おばさんが呼んでます」

はあい、と元気に返事をして、真維が飛び出していく。

4.

パタパタと走っていく二人の足音を聞きながらガウディアは微笑みながら鎧戸を閉め、ふと、棚の上に置かれたこじんまりとした鏡台に目をやった。

宿のおかみが女三人なのに鏡もない部屋なのを気にして、わざわざ貸してくれた物である。

ブラシ程度しか置かれていない鏡台に、一つだけ娘らしい物が置いてある。

丸く磨き上げた水晶に、花を閉じ込めたペンダント。

透明な水晶の中で、小さな黄色い花が色あせる事無く咲いている。

不思議な石は、邪眼の魔導士の手によるものらしい。

公子から送られたお守りだと、真維が言っていたのを思い出す。

真維に良く似合う日の光そのもののような花。

五月という奇妙な名前の花を見るに付け、セイルロッドが真維をグリフに赴かせた事を不思議に想う。

この花を贈った公子が彼女をどれだけ大切に想っているのか、僅かでもカリストの内情に詳しいものなら良く知っている事だ。

仮にも一国の世継ぎが、何の官位も持たない一介の女魔導士を婚

約者にしてのけたのだ。貴族達や元老院の反対にすら、耳を貸すことは無かったという。

それほどまでして手に入れたはずの少女を、彼はなぜ手元から飛び立たせたのだろうか？

真維が自分の意志を押し通したのだと聞かされても、釈然としない疑問が残る。

あの少女の笑顔を手に入れて、手放せる者がいるのだろうかと……

セリフイスに心酔し、忠誠を密かに誓っているガウディアですら、真維の笑顔には弱い。

太陽のような笑顔を裏打ちする、真っ直ぐな心。機転の利く聡い目と鋭い洞察力。

そして何より、己の信じる道を突き進む強い心。もしセリフィスの前に彼女に遭っていたら、自分もまた信奉者の一人になっていたかもしれない。

グリフに入って三日目の晩が思い出される。

セリフィスから、イ・コルネというガウディアの本当の名を聞かされながら、あくまでガウディアと呼びつづける真維に、彼女は元間者としての疑いを解かれないのだと落胆していた。

なにせ相手は筆頭魔導士代行なのである、白鴉の名は闇の世界では知れ渡っている。

白鴉がとれほど狡猾に立ち回り、必ず目的を遂げる非情さを持ち合わせているのか、真維は知っているはずであった。

交替で火の番をする旅の夜。起きてきた真維に、ふと自嘲気味にそう漏らした。

しかし返ってきた言葉は、予想にもしていないものだった。

「あたしがあんたの本当の名を呼ばないのは、その名前が、フィーにだけ教えられたものだからだよ」

驚き見詰める彼女に、真維はにっこりと笑って見せた。

「フィーに呼んで貰いたいから、本当の名前を教えたんでしょう？あたしが呼んでいい名前じゃないもの」

そして真維は、きっぱりと言い切ったのだ。

セリフィスが信じている人を、自分が疑う事は無い。と……

ふと悪戯心が首を擡げ、裏切られたらどうするのか？　と聞いてみる。

栗毛の少女は簡単に答えてきた。

「それはしょうがないよ、信じたのは自分だもん。裏切られたからって相手を恨むのはお門違いでしょ？　自分の見る目が無かったって事だよ。でも、人から信頼された人が、それを裏切るのって、なんか大変な理由があることだとも思うんだ」

甘いかな？　と笑い。次いで気遣わしげに、白鴉がグリフに来ても大丈夫なのかと聞いてきた。寝返った間者である彼女がどれほどの危険を冒しているのか、真維にはその方が気がかりのようであった。

白鴉の素顔を知るものは、ここに居る二人しか居ない。だから気に病む事はないと安心させながら、ガウディアは今までの人生で二度目の衝撃を受けていた。

自分を許したセリフィスの純粋さに打たれた衝撃と似ていた。

こんな年の少女が、何故ここまで達観した物の見方ができるのだろう？　どうしてここまで強く心を持てるのだろう？

自分とはまったく異質の魂をもつ少女。しかし、惹かれずには居れない。

ガウディアはあの夜から、この稀なる二人の少女を守ろうと心に決めていた。

たとえ、自分の命と引き換えにしても。

「真維……わたくしは、貴女にも、イ・コルネと呼んでもらいたいのよ……」

五月の花に向かってそう呟いてガウディアは、賑やかになってきた階下へ降りるべくそっと部屋のドアを閉めた。

少女は、声にならない悲鳴を聞いていた。

一日に数度この時は訪れる。

命を貪り喰われる激痛に影がのたうつ。

碧玉の瞳が、その様を静かに見詰める。

やがて動かなくなった影に、少女はふわりと歩み寄る。

「死んじゃった？」

答えはない。

「今夜はお月様が出てるよ」

答えは待たずに、天井にある明り取りから差し込む僅かな光の柱へ、足音も無く駆け込んでいく。

光の中で、少女が踊る。

金色の髪が月光を反射しながら拡がる。

「赤い赤いお月様……あんたの恋人だね」

影がゆらりと起き上がる。

少女に向けて首を振ったようだが、光の中で踊る少女には闇に沈んだ影は見えなかった。

1.

王都というものは、元来、王の元に貴族が集う事に端を発する。

始まりには城があり、その周りに貴族が居を定め、物資の流通が発生する事によって、外側に蟻が群れるように庶民が集まりだして、街が形成される。

都の発展というものはそんな経緯で出来上がっていくものだ。

諸貴族は、それぞれ王から領土を与えられ、領地に屋敷もあるが、ほとんどが王都に生活の中心を持ってきている。

大抵の貴族は、王城の城門内、一の郭と呼ばれる地区に上屋敷を置き、王城へ伺候し易いようにしている。貴族同士の交流も上屋敷が中心であり、いうなれば表の顔の屋敷である。

それに対して、家族や親族が立ち寄ったり、内輪のこまごまとした事をするために使用されるのが、城下町の一角に置かれる下屋敷である。貴族の子弟が生活の場として使用する事も多い。

貴族達の住む地区。商家の多い大通り。真維達の居るような下町の繁華街。

暗黙のうちに作られた住み分けは、グリフもカリストもさほど変わらない。山を背にして、半要塞の態を取るグリフ王城に程近い、小高い丘になった下屋敷の連立する高級住宅街は、『山の手』と呼び習わされている。

2.

ひっそりと寝静まった町並みを、黒い影が過ぎっていくのが、雷光の中に浮かび上がる。

影は三つ。

巧みに影を縫い、闇に身を沈めていく。

月も星も無いただ暗いだけの夜。ほんの刹那の雷光に浮かび上がる街路を見定めて、次の目標へ走る。

燈明も、ましてや魔法で呼び出す灯りも使えないが、それでもぼんやりとした輪郭は、闇の中でも見ることができた。

物陰に身を潜め、ガウディアが次の目標までの安全を確認する間、真維は闇に慣れた自分に苦笑する。

召還魔法実験の失敗によって、理不尽にも引きずり込まれたこの世界。しかも帰る方法が判るまで、ここで暮らせと強要され、仕方なく生活を始めた当初。夜の暗さに閉口したものだった。

夜道を煌々と街路灯が照らし、家の中では常に明るい電灯が闇を払う自分の世界。

曲がりなりにも日本の首都に生まれ育った彼女には、灯りの無い夜など信じられなかった。

いや、勿論、ランプの明かりは在るし、彼女の元保護者のクレイ

スなどは、夜の読書をしやすくする為に、魔法で光球を呼び出していたりもした。

カリストの王都には、他の村や街には見られないほどの規模で、灯篭の様に街路灯が設置されている。専用の係りの者を措き、夜中途切れなく灯を灯すのだ。

だが、それでも暗い。

『カリストは暗いんだ』などと冗談めかしてぼやいたこともあった。

あまりに闇に慣れていない目は、クレイスに鳥目を疑われたほどである。

それがどうだろう。

今では雲内放電の鈍い光で浮かぶ、街の様子を見て取れる。

星明りで夜道を歩くのに不自由も無い。

人間というのは慣れるのだ。

魔法の期限によって、とうに元の世界に還る術は無くなった。しかし、自分は既に、この世界に馴染んでいる。

友人を作り、恋を知り、涙を知り。求婚を受け、婚約者の横で微笑むことを覚えた。

そして今、すべての答えを求め、道を定めて走っている。

我侭だと非難する自分がいる。心の奥で。

セイルロッドの横で学んだのは、自分を制御する術だったから。だが、もう止まらない。

止まれない……

「いきます……」

ガウディアの密やかな声に、真維は物思いから醒めた。

無言で頷いて、細い肢体が軽やかに翻るのを見詰め、そのまま後に続く。後続のセリフィスもまた、鍛え上げられた動きで、音も無く石畳を駆け抜ける。

目指すは最奥。丘の頂上付近にある屋敷である。

3.

王が代替わりした場合、先代の側近は二つの選択肢を持つ事になる。

一つは新たな王に阿り、保身を保つ事。一つはあくまでも先代への忠誠を貫くこと。

円満な世代交代ならば、後者でも十分家は成り立つ。むしろ、忠義者よと誉れを受けるだろうが、今回のグリフでは、そういは行かない。

丘の上の廃屋敷は、先代の側近の持ち物だったらしい。

その貴族は、王の病死を暗殺だと言い放ち、今のグリフ王に謀反の疑いを掛けられて獄死した。

獄中で、その貴族は、グリフ王への呪詛を呟き続け、現王が死ぬまで、自分の目は閉じないであろうと言い残したそうだ。

その無念は、三年経った今もなお、冥界からの怨嗟の呟きとなって、この屋敷に蟠っている。というのが、巷での噂である。

実しやかに、夜な夜なその貴族の影が、窓辺に浮かび上がる、なんていう怪談まで流れていた。

「ホーンテッドマンションだわね……」

故郷の超有名な娯楽施設の、人気アトラクションを思い出して、

真維が呟く。

雷光に照らされてもなお、黒い影となって、無気味に静まり返っている廃屋敷は、放火により半ば崩れ、すすけたレンガの壁を晒す、正統派のお化け屋敷だった。

荒れ果てた庭に足を踏み入れ、人気の無いことを確認する。

他国との戦闘を繰り返し、その強大な軍事力を作り上げる為の秘術によって、魔法のバランスを欠き、天候も荒れに荒れているグリフでは。肝試しに乗り込もうとするような、物好きも居ないようだ。

ガウディアの指示に従い、三人の影が屋敷に近づく。割れた窓から、ひらりと飛び込む二人に続いて、少しばかりもたもたと、真維がよじ登る。

「大丈夫ですか？」

手を差し伸べてくれるセリフィスに、目顔で礼を言って、どうにか室内に入り込む事ができた。

屋内は、外より更に暗い。当たり前である。

真維は何度か瞬きをして、闇に目を馴染ませる。

「客間のようですわね……」

煤けた壁と、ぼろぼろになった天蓋付きの寝台を見ながら、ガウディアは何か別の気配が無いか探っているようだ。

セリフィスも同じようにしているのを見て、真維もそっと意識を伸ばしてみる。

意識を自分の体から放して、ドアの向こうへ。廊下をたどって階段を探り、さらに階上へ……魔導士ならではの芸当だ。

クレイスとゼルダが、魔導士としての意識の持ち方から叩き込んでくれたから。

特にゼルダは、普段のスチャラカさが嘘のように、真剣に心構えや有事での対処の仕方等、実践的な事を教えてくれた。

それが今役に立っている。

わずかな魔力で済むこの術は、今でも魔導士狩りをしているグリフ軍にも感づかれないが、一つだけ困った現象があった。

日に数度、王城の方から大きな魔道の波動が発され、こちらの意識をかき乱すのだ。

多数の魔導士の魔力が溶け合った波動は、どこか遠い悲鳴のようで落ち着かなくなる。酷い時には気分すら悪くなる有様だった。

女神の大樹から、魔力を吸い上げ、武器に付与する秘術が行われているのに違いない。

魔導士として成長し、鋭敏になった神経には、自然の摂理を捻じ曲げるグリフの秘儀は、不快そのものである。

そして、丁度階上に意識を伸ばしかけた時、また、それが始まっ

た。

「う……」

慌てて意識の腕を引っ込め、波動を遮断するが、剥き出しの意識で触れた、歪んだ魔道の波は、激しい嘔吐感と眩暈を誘発する。

口を押さえていきなり蹲る少女に、女騎士は慌てて駆け寄った。

「真維。また、『あれ』ですか？」

セリフィスに頷きながら、声も出せない。

涙が滲む。

不快感に混乱する思考の中で、真維はもう一つの感情を持て余していた。

「……ふぃ……」

「なんですか？　真維」

親友の腕を掴みながら、茶水晶が潤む。

「見つ……けた！」

「何を？」

覗きこむ翡翠に、真維の瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

「ゼルダ――――」

どうにかそれだけ搾り出し、真維は失神した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2043x/

蒼の封印

2011年12月6日23時45分発行